

秘められた日本古代史「ホツマツタエ」より抜粋

ホツマツタエの発見と研究 p209

ホツマツタエ 全巻発掘までの探索 p211

神田の古本屋で目にとまった写本 p211

- ・昭和四十一年八月のある日神田の古本屋で二冊の本を購入。
棚に古代文字関係が四、五冊あり。その内、二冊を買い求める。
一冊は、美女森大御食神社の神宝と伝えられたもの
二冊のうちのもう一冊は、「秀真伝」と云う写本でした。 P212

写本の内容 P218

さてここで、私が古本屋から入手した写本「秀真伝」について簡単に説明しておかねばならないでしょう。

「秀真伝」は、

- ・菊判（A5版）
- ・開巻第一頁の右肩に、「近江国高島郡産所村三尾神社神宝」とあり、左よりに「秀真伝」とあり。

・枚数

- | | | |
|-----------------------------|------|------|
| 一、「秀真政伝記ヲ奉ル文」（正木昇之助、小笠原長弘） | 三枚 | p219 |
| 二、私考（正木昇之助） | 一枚 | |
| 三、「神字用格」（正木昇之助） | | |
| 四、「自序」（和邇コ容慧トシ） | | |
| 五、ホツマツタエの原文（振仮名つき） | | |
| イ、ホツマツタエを述ぶ（秀真伝を述ぶ） | 六枚 | |
| ロ、キツノナトホムシサルアヤ（東西の名と穂虫去るアヤ） | 九枚 | |
| ハ、アメナナヨトミキノアヤ（天七代トコミキのアヤ） | 八枚 | |
| ニ、ハラミツツシムオビノアヤ（孕み謹しむ帯のアヤ） | 二十四枚 | |

この秀真政伝記ヲ奉ル文を見ると、この写本は明治七年七月、左院十二等出仕上正木昇之助（注）と愛媛源士族小笠洞長弘の両名が・・・「ホツマツタエ」

なる文献を宮中に捧げるため書かれたものであることが分かります。

(注) 正木昇之助

後に、宮城控訴院検事になった人物で、滋賀県東浅井郡竹生村出身であった、

ホツマツタエの発見 p220

ところで、このホツマツタエは奉呈文の筆者小笠原長弘の叔父小笠原通当(みちまさ)なる人物によって、天保年間に発見されたのでした。通当は当時、京都御所近くに鎮座していた延喜式内社の左京二条坐神社、通称天道宮の神主だったのでした。たまたま近江国高島郡産所村三尾村を訪ねて、古老からこの書のあることを知らされました。

向学心に燃える通当はこれを京都に拝持し、鋭意読解に努めました。この結果が「神代巻秀真政伝一十巻となって天保十四年に出版されたのでした。

通当没後、長弘はホツマツタエの原本を三尾社に返納し、一方自家のためにも一本を筆写し、家宝として郷里の四国愛媛県の宇和島に伝えてきました。それが「明治のよき時代を迎えたので、ここに宮中に奉呈したく思い立った」というのです。

宇和島、小笠原家で発見された秀真伝

宇和島のどこかに p232

愛媛県町村沿革史に、小笠原長道という人がいたのです。・・・ わが求める小笠原長弘の縁続きの方に違いない。

「小笠原家」発見の吉報 p233

一本松町、

そして、ついにホツマツタエを祖先伝来秘蔵する小笠原家を見つけてくれたのです。・・・ 笠原家の当主は、長道氏の甥の長種氏と云う事も分かりました。

目指す書物は焼かれていた p234

「小笠原様の手紙をみて、あまりの事に茫然としました。」・・・そこには、次のように書いてあったのです。「・・・秀真伝は、拙者宅にありましたが、昨年あまり汚れていて尊とい本として、甚だ不敬になると思ひ、祖先の生前で謹ん

で焼却しました・・・・」

P235

小笠原氏の奥さんのお手紙も入っています。そこにはこんなことが書いてありました。「・・・・父上は非常な敬神家で名もなき学者だったと聞いております。大昔からいろいろな書物が沢山ございましたが、まだ残っているものもございいます。父上の書いた物の中から二冊だけお目にかけてたいと存じます。松本様へも私共うれしく存じますことをお伝え下さいませ・・・・」

ここにある「父上」とは小笠原長武という方で、私が初めて知った方でした。現当主、長種氏の実父で、やはりホツマツタエに一生な捧げた学者で、神道家でもあったようです。後で送られてきた長武氏の書いた二冊の写本をみるに及び、並々ならぬ傑物であったことがはっきり分かり、私は新たな発見に目を見張りました。たとえ、目指すホツマツタエは焼かれて無いとしくも、このような写本やその他の古書が沢山あれば、それだけでも収穫です。ともかく行こう。私の宇和島行きの気持ちはつのるばかりでした。

伝来の書が出現 p236

その数日後、今度は小笠原長種氏から直按、私に宛てて速達が届きました。「・・・・初めてのお便りがどうもそうではなく親交久しき感じが致します。これ神典の致すところ有難き次第です。私の不注意から尊といホツマツタエを兩もりと鼠害とで汚しました。神に対し先祖の努力に対し相済まぬ気持ちでした。且つ私は今年七十五歳になり、余命幾ばくもありません。息子もありますが、この尊とい神典の維持は覚束ない思い、再び不敬に至ってはならぬと、一昨年冬妻と相談して先祖の霊前で、謹んで焼刻しました。すみません、お許し下さい。

ところが、昨日(七月十四日)責殺ご発行の卸誌「盲人に提灯」の五巻六号を頃き、拝見すると、先相のことが述べられてあるではありませんか。ほんとに有難く思ひました。奇しくも其の日、八冊のホツマツタエが拙宅の二階から現れました。これは縦二一・五糎、横二十糎の大きさ、褐色の表紙和綴で筆書きです。奉焼したのは上等の白色紙質、美濃大形半紙、立派な和紙でした。一字一字丁寧に書き漢字の併記あり、三十か四十か大部数でした。甚だウカツの話、恐縮です。私の子供の頃、父長武が毎日毎

P237

日、机に向って真白で立派な半紙に神字を書いていたこととを覚えております・・・・」。

そして通当氏の子孫の小笠原治三郎氏の京都の住所や小笠原家の系図なども

書き添えてありました。通当氏とは、二百年前、ホツマツタエを三尾神社で発見した方であることは前に書きました。私はこの手紙をみてホッとしました。たとえ少しでもこの奇書がでてきてよかったと思いました。そして長種氏がどんな気持で、この神典を焼却したかがよく分かりました。さらに今、氏がどんなに悔んでおられるかも分かりすぎるほどよく分かりました。その心中を察し、今後一切、このことには触れまいと心に決めました。

お手紙に添えてあった次の系図を拝見すると、ホツマツタエの発見者、通当氏、その甥で宮中に奉呈した長弘氏、そしてまたその甥になる長武氏と、まさにホツマツタエに捧げる三代の苦心ともいうべきものです。約百年の間、心血を注ぎ、脇目もふらず、ねばり通した悪戦苦斗の記録がここに脈うっているのを感じて、私は心から感動しました。その翌日、もう耐えられなくなった私は東京をあとにしたのでした。

小笠原家略系図（赤字はホツマツタエ研究者）



小笠原家の系図の長さ P238

宇和島へ直行する前に、私は京都で途中下車しました。通当氏の孫の小笠原治三郎氏を沽燭するためです。手紙を差し上げておいたので治三郎氏は私の訪問を心待ちにしてくれました。お宅は京都御所に近い所でした。家業の電気機具販売店を息子さんにまかせ、悠々自適でした。この年九十二歳、矍鑠たるもので、奥さんも八十九歳、夫君よりもっと丈夫だと言います。

私は安置された通当氏の神官姿の木像の前に額づいて柏手を打ちました、

治三郎夫妻は、巻物になっている系図や古文暮などたくさんひろげて説明してくれました。私は古い家柄の系図というものを初めてみて目を見張ったものです。平安時代の清和天皇(八五九年)から発して今日までの千数百年の歴史がそこに生きていました。ぐるぐる巻いてあるので、一体どのくらいの長さになるか見当が付きません。古文書の中にはこんなものもありました。平安朝の高倉天皇(1171年)の時、妖怪が皇居を悩ましたので、小笠原遠光が紫寝殿に登り、鳴弦の秘法をもってこれを退治し、家紋に「王」の字な賜り、江州志賀郡に知行を賜わったとあります。

こんな時代から近江国とは縁があったのだから、ホツマツタエを三尾でみつ

けたのも、あながち偶然だとは言えない、と思いました。その後、松本城主だった忠ながは大坂の陣で戦死したので、一子左京を

P239

家臣の郷里、伊予の宇和島に ” 隠子 ” として落しました。その後、仕官の道を絶って宇和島に住むようになりました。その後、分家して通当は京へ出、以後京住いというわけです

私は写しをとるため、午後三時から九時まで机に坐りづめでした。治三郎翁もそばにつききりで、時折、説明してくれます。とうとう時間切れで、写し残した『小四郎京学日記』と『当家代々十小笠原氏家帖』とを拝借することを許していただきました。前の小四郎とは通当氏の幼名で、これは宇和島から京都へ修業にてかけたときの日記であり、後は先祖由来記です。通当氏は文政二年生れ、京に出て垂加神道家、玉田永教の弟子になり、のち天道宮の宮司として六十四歳で死去しました。ホツマツタエを発見した功績は実に大きく、前述の「神代巻秀真政伝」十巻という大著があります。通当氏についてはなお知りたいことが多いのですが、まずは子孫の方にお目にかかれ、古文書を写させていただいたことで満足することとし、治三郎ご夫妻のぜひとひきとめるのも辞してその夜のうちに、私は四国に渡る汽車に乗っていました。

翌朝早く、松山に着きました。何として毛篠崎氏にお礼にうかがわなければなりません。篠崎顕一氏は久万の「雪娘」という醸造元で、戦時中まで銀行

P240

の頭取もやっておられました。仕事は養子さん任せ、松山においでの方が多いらしく、高雅なお人柄で趣味も深い方でした。岡本さんにも会えました。調査と事務処理に卓越した能力な持つ未亡人で、お孫さんもあるそうです。篠崎家の皆さんに総出で大歓迎され、ホツマツタエ発見までの苦心談に花が咲きました。次の日早く、私はいよいよ宇和島行きの列車に乗りました。

虫食い本と感激の対面

宇和島駅に着くと、小笠原長種氏が迎えに出てくれていました。しかし私はそれと知らずタクシーでお宅へ直行しました。小笠原新田といえば、誰も知らないものはないそうです。奥さんと初対面の挨拶をしている所へ、当の長種氏が駅から戻ってこられました。

劇的シーソというのは、こらいうことを言うのでしょうか。世の理解を得られ

ず、小笠原家三代百年の間、あらゆる努力にもかかわらず埋れ埋れて、もうダメかと思ひ焼却まであえてした大事について、突如として、それを追い求める者がはるばる訪れたのです。

長種氏は大きな頑丈な体を固くして目に涙を一杯ためてこう言いました。七十五歳には見えぬほどとても若々しい。そばで奥さんが、言いました。

「夢のようです。まだ、どうしても本当とは思えないんです。こんなに嬉しいことはありません。それ

P241

にしても申し訳ないことをしました」

申し訳ないというのホツマツタエを焼いてしまったことを指すのでしょうか、私はもうそれには一切触れませんでした。しかしこの時ほどきてよかったと思ったことはありません。

床の間に、父上の長武氏の大きな写真が飾られていました。深々と頭をたれたのはもちろんです。すばらしいお顔です。細面、白髪、頬骨が高く、眼光まさに射る如し。いかにも七十二年の一生を「秀真」一筋につらぬき通した面魂です。

長種氏との話はさっそく本筋に入りました。

「あとから出てきたホツマツタエはこれです」

長種氏は八冊の虫食いの激しい立派な写本をみせてくれました。長武氏の筆跡と言います。しかし、全部は挑っていませんでした。でも、こうして焼失を免れたのは何としても幸せです。何ものにもかえがたい有難いことでした。後で調べたら十七アヤから四十アヤまであります。初めの一アヤから十六アヤまでの部分が欠けているのです。これは、親父が書いたものです」

P242